

独鈷の滝(丹波香良山)を見る

(学習・令和4年10月1日 担当 斎藤、田村、田村、西村)

原文

(「静養館記」より)

天保甲辰九月、余同_二諸友人_一、游丹州香良山、穿_二長林_一、攀_二石徑_一、
濯_二清池_一、窺_二空洞_一、望_二絶壁之飛泉_一、愛_二懸崖之垂松_一、踰_二峰巒_一而下_二溪澗_一、
行_二乎巉巖峻峭之間_一、至_二深幽處_一、皆坐談_二玄_一、仰而見_二皎月之破_レ雲_一、
俯而聽_二哀猿之時_一、恍惚乎殆非_二人間世之興味_一也、
是夜因宿_二山中岩瀧寺_一、(以下略)

甲辰九月遊_二丹州香良山_一作

踪跡卅年淹_二俗寰_一

今朝始是入_二名山_一

雲巖絶壑蒼松老

一道飛泉亂石間

読み下し

天保甲辰九月、余諸友人と同じゆうして、丹州香良山に遊ぶ。

長林を穿ち、石徑を攀り、清池を濯い空洞を窺き、絶壁の飛泉を望む、

懸崖の垂松を愛で、峰巒を踰え、溪澗を下る、

巉巖峻峭の間を行くや、深幽なる處に至る、

皆坐して玄を談じ、仰ぎて皎月の雲を破れるを見る、

俯して哀猿の時に叫ぶを聴く、恍惚として殆んど人間の世の興味に非ず也、

是夜因りて山中岩瀧寺に宿す、

天保甲辰九月

丹波香良山に遊び作る

踪跡卅年俗寰に淹う

今朝始めて是の名山に入る

雲巖絶壑蒼松は老い

一道の飛泉亂れて石の間

訳 (写真等は西村正さんによる)

天保十五(一八四四)年九月、私は友人と同行して丹波香良の山に遊んだ。



長く続く林を通り抜け、石の狭い道をよじ登り、きれいな水の谷を渡り、空洞をのぞいて、絶壁から落ちる滝を見た。高い崖に枝を垂れている松を眺め、そびえ立つ山々の連なりをこえ、そして谷を下る。

高く険しい切り立った山の間を進み、奥まったひっそりとした隠れ里のようなところに来た。

みんな座って、奥深い道理について話しあった。仰いで見ると、雲の切れ目から白く輝く月が見えた。うつむいていると、哀れに猿が鳴くのが聞こえた。うつとりしてしまつて、この世のこととは思えなかった。この夜は、山中にある岩滝寺に泊まつた」(『静養館記』から)

「(天保15)一八四四年九月(八鹿に帰省した翌年)

丹波香良山に来て作る。

人生三十年俗世間の中で過ぎた。

今朝初めてこの名山に入った。

険しい岩は高くそびえ、蒼い松は古木。

一筋の滝が石や岩の間を乱れ飛んで行く」



岩滝寺境内に有志によって
詩碑が建てられている

語句

同||おなじくして トモニ 穿|| 間をぬって通り抜ける。 攀||よじる

濯||アラウ 窺||うかがう のぞく 懸崖||ケンガイ がけ 踰||コエル

峰巒||ホウラン 連なつた山々 溪澗||ケイカン 澗||谷 谷川 「同義語」澗

巉巖||ザンガン 山がごつごつと切り立っているさま。②険しい山

峻峭||シュンシヨウ 峻||シュン山が高くけわしい 峭||シヨウ けわしい

玄||奥深くてよくわからない微妙な道理 皎月||コウゲツ 白く輝く月

叫Ⅱ叫 踪跡Ⅱソウセキ 〈踪蹟〉①物が移動したあと。②事が行われた結果として残ったもの。③行方。寰Ⅱカン まるい大空におおわれた世界。 参・ 人寰Ⅱ俗人が住む世界 滝Ⅱオオウ ヒタス 雲 巖Ⅱゲン ガン いわ けわしい
絶壑Ⅱゼツガク 切り立って深くて険しい谷

「独鈷の滝」について（岩滝寺の案内説明書より）

滝壺より毒竜が出没し害があるため「独鈷」を投げ成仏させた。独鈷の滝は落差約20 m。「独鈷」……真言密教の法具の一つ。本来はインド古来の武器で煩惱を払う目的の法具

